

海外紹介

世界の鍼灸コミュニケーション(7) —英文外国雑誌に見る鍼灸研究の流れ—

川喜田健司

全日本鍼灸学会国際部委員、明治鍼灸大学生理学教室

はじめに

本稿は、世界のコミュニケーションのシリーズとして、中国の学術誌に関する兵頭氏の詳細なレポート(シリーズ2報、1995)の続編として、鍼灸に関連した英文の学術誌を紹介するものである。英文の鍼灸関連雑誌は数多く見られるが、本稿ではわが国で比較的良好に知られている雑誌である、American Journal of Acupuncture誌(以下AJA誌) American Journal of Chinese Medicine (AJCM) 誌、Acupuncture and Electrotherapeutic Research (AER) 誌の3誌を取り上げた。この3誌の国内の研究組織や図書館での購読状況を調べた結果では、AJA誌が24施設、AER誌の21施設、AJCM誌は5施設であった(形井による、1995)。最初の計画では、最も良く読まれていると思われたAJA誌に関する解説を予定していた。しかし、AJA誌の編集部からその編集システムに関する情報が正式には入手できなかったこと、またその内容の解析結果から、十分な査読システムが働いているとは考え難い掲載論文が多いことが判明した。そこで、今回は上述した3誌の1993-95年の掲載論文の比較を中心に行った。またAJA誌に関しては、1977年(第5巻)から1992年(第23巻)までの掲載論文についても解析の対象とした。

3誌の概要

American Journal of Acupuncture

AJA誌は1973年に発刊された季刊雑誌であり、学会の機関誌ではない。掲載論文を見る限り、編集

部において内容の妥当性と英文のcheckが行われているものの、査読者によってその論文の妥当性、内容の新しさ等の基準に従って掲載の可否を判定しているものではない。この雑誌の掲載論文をみると、学術論文以外にも解説や随筆的な記事が多く見られる。また、他雑誌の掲載論文のAbstractや学会カレンダーも載っているなど、純然たる学術誌というよりは鍼灸関連の情報誌的な総合雑誌といえよう。

本誌は世界的に有名な医学情報誌であるIndex Medicus(データベース名: MEDLINE)には掲載されていない。しかし、Excerpta Medica (EMBASE)をはじめとする主だった二次資料誌、(Automatic Subject Citation Alert, Current Contents-Clinical Practice, Dental Abstract, Medical Care Review, Oral Research Abstracts, Science Citation Index) にリストされている(1996年、24巻2/3号による)。言い換えれば、本誌に投稿した論文はかなり広範な読者層の目に触れる確率が高いと考えられる。しかし、掲載論文の内容を調べてみるとまさに玉石混淆であり、時々興味深い報告が掲載されることもあって引用されることも多いが、全体としてみた場合の学術誌としての質は決して高いものではない。

American Journal of Chinese Medicine

一方AJCM誌は1973年に発行された雑誌であり、その編集長はF. Kao氏という生理学者であった。そのため発刊当時は鍼鎮痛の生理学的な研究論文が多く見られ、現在もその伝統を受けて基礎的な研究論文が多く見られる。しかしその発行が

大幅に遅れたり、雑誌名が一時Comparative Medicine East & Westと変更されるなどの混乱があった。そのために事情が分からないまま購読を中止した図書館もあり、それがわが国での購読組織の数の少なさに反映しているものと考えられる。その後、WHOの伝統医学のCollaboratory Centerである、The Institute for Advanced Research in Asian Science and Medicine, Inc.が発行母体となり、刊行が安定するようになった。そして現在では内容的にも次第に充実した雑誌となっている。本誌はIndex Medicus、Biological Abstracts、Current Contents/Clinical Practiceにリストされている(1996年、24巻2号による)。

現在の編集長はJ.J. Kao氏である。投稿規定もしっかりしたものになり、編集委員には数多くの基礎医学者が含まれているのが特徴であり、日本人の投稿者も多い雑誌である。その内容としては、鍼の基礎的な研究以外にも漢方薬の効果を基礎的に調べた研究も多く見られる。その論文の学術的な価値に関しても徐々に優れたものになりつつあり、現在日本でわずかに6つの図書館でしか購読されていないというのは非常に残念な事態である。

Acupuncture and Electrotherapeutic Research

AER誌は1975年にPergamon Press社から創刊された雑誌で、編集長はニューヨーク在住の大村恵昭氏という日本人医師である。本誌は鍼と電気治療のユニークな雑誌であり、現在は1994年(第19巻)から大村氏が学長を務めるInternational College of Acupuncture & ElectrotherapeuticsのOfficial Journalとされている。それに伴い、発行所も当初のPergamon Press社から、Cognizant Communication Corporation社に変更されている。

本誌は以下に記すように多くの二次資料にリストされている。Current Contents, Excerpta Medica, Index Medicus, Index Veterinarius, CINCHL, Biological Abstracts, Index to Dental Literature, Engineering Index Monthly and Author Index, Science Citation Index, PsycINFO, COMPENDEX, Current

Advance in Life Science (1996年、21巻2号より)。

本誌の特徴は、雑誌名からも分かるように、生体に対する電気刺激の効果に関するものが多く含まれている。その他、気功やBi-digital O-ring testに関する論文も掲載されている。投稿規定や編集方針等に関してはきちんとした形が作られており、編集委員の中には数多くの著名な研究者も名を連ねている。鍼の学術雑誌としてはユニークな存在であっただけに、今後の動向が注目される。

1993-1995年の3誌の比較

1993年から1995年の3年間に発表された3誌の投稿論文の総数は、AJCM誌が最も多く110編、ついでAJA誌が88編、AER誌が44編となっている。その論文投稿者を主な国別にまとめたものが図1

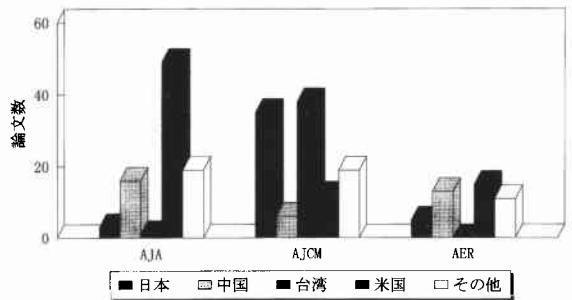


図1 3誌の国別論文の比較

である。AJA誌においては米国が49編(57%)とずば抜けて多く、次に中国が続く。日本からの論文は非常に少ない(8%)。全体として数はそれほど多くないものの、その著者の国別では12ヶ国を数える。一方、AJCM誌は台湾からの投稿論文が最も多く(35%)、つぎに日本(32%)、米国(11%)の順となっており、全体で16ヶ国を数える。台湾と日本からの論文がきわめて多く、鍼灸関係の論文よりも湯液に関連した薬理学的な論文が多いのが本誌の特徴である。一方AER誌では米国(34%)、中国(30%)、日本(11%)の順となっており、全体で11ヶ国からの投稿がある。

以上、論文の著者の国の分布にも、これらの雑誌の違いをはっきりとみることが出来る。AJCM誌に日本と台湾からの論文が集中している。その一方で、AJA誌では米国からの投稿が圧倒的に

多いことが特徴である。AER誌は編集長が日本人であることから、日本からの投稿が多いのではないかと想像していたのであるが、予想外の結果であった。

AJA誌における投稿者の国別の違いの経時的変化

表1はAJA誌の1977年から1995までの掲載論文の先頭著者の国別の分布を調べたものである。すでに指摘したように、米国からの投稿論文が圧倒的に多く、全論文数(701編)のうちの52%にあたる367編を占めている。その次に続くのは、中国(52編)、ドイツ(32編)、ルーマニア(29編)、カナダ(26編)、日本(26編)、オーストラリア(22編)の順となっており、日本は5番目である。それ以外にも世界の36ヶ国から投稿されている。

つぎにそれらの論文を原著論文(基礎、臨床)、総説、エッセイ、その他として大まかに区分した

ものを年代毎にまとめたものが図2である。ここでいうエッセイとは、何らかの実験データに基づいて解析し考察を加えるという形になっていないものを指している。その他は資料に類するものを含んでいる。全体として論文の総数が減少する傾向が見られるが、内容的には基礎や臨床の原著論文が減少気味であること、エッセイと分類されたものが相変わらず多いことが挙げられる。ここで原著論文と分類した臨床研究はほとんどが症例報告であり、対照群をおいた研究は全体で20編しかなく、実験データがきちんと評価されて何らかの検定の結果が示されているものはさらに少なかった。また、臨床の技術に関する報告が79編見られたが、いずれも臨床研究と妥当な方法による結果が伴っていないのが難点である。一方、獣医の分野における臨床報告も26編見られた。基礎的研究に分類したもののほとんどはヒトを対象とした研究であった。

表1 AJAにおける掲載論文の国別分布

国名	論文数	国名	論文数	国名	論文数
米国	367	スリランカ	10	ノルウェー	2
中国	52	シンガポール	10	イタリア	2
ドイツ	32	チェコスロバキア	8	香港	2
ルーマニア	29	ニュージーランド	6	オランダ	2
日本	26	台湾	6	アイルランド	2
カナダ	26	ロシア	5	スイス	1
オーストラリア	23	スウェーデン	4	ジャマイカ	1
イスラエル	17	インドネシア	4	ポーランド	1
イギリス	14	ベルギー	4	キューバ	1
インド	13	ナイジェリア	3	ボリビア	1
フィンランド	11	メキシコ	3	ハンガリー	1
フランス	10	イラン	2	ブルガリア	1

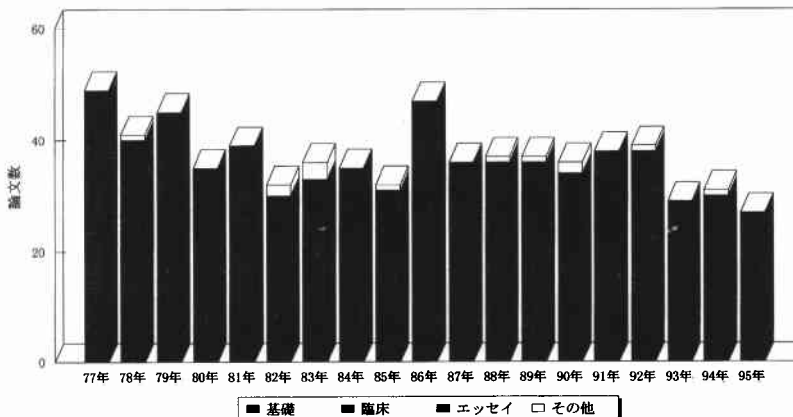


図2 AJA誌の論文内容の変化

ま と め

以上の3誌に共通して言えることは、いずれも査読のシステムが十分に機能しているとは思われない内容の論文が掲載されている。それが大きな難点となって、学術誌としての評価が比較的低いのが残念なところである。鍼灸に関連した英文の雑誌は、もちろんこれまで紹介した3誌に限られているわけではない。すでに兵頭(1995)によって紹介されているように、中国から発行されている針刺研究誌がMedlineに掲載されている他、世界鍼灸学会連合(WFAS)の機関誌であるWorld Journal of Acupuncture—Moxibustionも中国から発行されている。いずれも鍼灸関連の雑誌としては興味深い論文も多数見られるが、国際的な学術誌として広く普及するためには、まだ改善すべき余地が残されているように思われる。また中国のScientia Sinica誌、Chinese Medical Journalも鍼灸の専門誌ではないが、多くの鍼灸の論文が掲載されている。

一方、学術雑誌として国際的にも評価が確立している雑誌にも多くの鍼灸に関連した研究論文が発表されている。痛みに関してはPain、神経生理学的な機序については、Brain Research、Neuroscience Researchなどがその代表である。かつてはExperimental Neurology誌にも多くの鍼の論文が掲載されていたが、その後編集方針が変更されて、鍼の論文が載る可能性はほとんど無くなっている。これらの学術雑誌に掲載された論文は、その査読システムが確立されていることから学術的な価値の高いものとして参考論文として引用されることが多い。そのため、鍼灸の研究は鍼灸の専門誌以外の雑誌に掲載された論文の方が広く知られているというのが実状である。

しかしそれらの雑誌は、いずれも現代医学の立場から見た鍼灸の臨床研究・基礎研究の成果に限

られている。そこには鍼灸のツボの特異性や得気、手技の違いなどの強い特色を打ち出した研究論文はほとんど見あたらない。それは各雑誌ごとに編集における査読のシステムがあり、鍼灸についての一定の共通理解が査読者と編集者と著者の間に得られないと、掲載されるまでには至らない場合が多いためであろうと思われる。

その意味では鍼灸の専門性を打ち出した上記の3誌の内容が充実され、これまで以上の高い評価が得られるようになることが大いに望まれる。いずれの雑誌も、最近はずっと定期刊行がおこなわれているようなので、上記の3誌に限る訳ではないが、我が国からもさらに多くの論文が英文誌に発表されるようになり、日本の鍼灸研究の現状がより広く国際的に理解されるようになることを期待するものである。もちろん本学会誌を充実させることの重要性を抜きにする事はできないのは言うまでもない。

今回は個々の論文の内容について解析をするまでには至らなかったもので、稿を改めて各雑誌の中から特色のある研究論文を取り上げて紹介してゆく予定である。

謝 辞

本稿をまとめるに当たり明治鍼灸大学生理学教室の教室員ならびに学生諸氏に多大な協力を得たことを感謝する。

文 献

- 1) 兵頭 明：世界の鍼灸コミュニケーション(2)－中国の鍼灸雑誌－。全日本鍼灸学会雑誌、45：147-152、1995。
- 2) 形井 秀一：世界の鍼灸コミュニケーション(4)－鍼灸関係の外国語雑誌は日本のどこで読めるか－。全日本鍼灸学会雑誌、45：278-295、1995。